

家島諸島を事例にした関係人口論の構築のための準備的調査

—兵庫県立大学環境人間学部学生へのアンケート調査の報告—

都市計画研究室（濱田悠輔・大江万梨・神原秀政・米田達海・太田尚孝）

1. アンケート調査の背景・目的

近年、人口減少に悩む地域が全国各地で増加している。これは地域づくりの担い手不足に直結し、全国各地で持続的な地域活動が困難になりつつある。ここで言う担い手は専門的知識を有した者よりも将来的に様々な形で地域に関わる可能性のある若者（学生）のことを指す。この若者の地域に対する考えや感情を知ることは人口減少で悩む地域への解決策の糸口が見つかるのではないかと考える。関係人口論から考えると地域に定住することは必ずしもゴールではない。なにかしらの関わりを持つことが必要であり、家島諸島のような人口減少下にあり、若者の流出が深刻な地域においては最初の段階として関わりを持たせることが最優先である。そのファーストステップとして姫路市に立地し、家島諸島の交流人口が多いと考えられる兵庫県立大学環境人間学部の学生を対象として、家島諸島の認知度や、条件不利地域に関わることに對する認識を把握するために行った。大部分は調査・研究の定量・定性的データの収集であるが、同時並行で行われる実践プロジェクトの内容を吟味する参考にもなると考えた。

アンケート調査は、2018年6月26日の「まちづくり論」受講者112名を対象とし、回収数は112（回収率：100%）、そのうち66%は2年生であり、男性が25%、女性が75%、回答者の出身地は58%が兵庫県内であった。なお、このアンケート調査は、「いえしまコンシェルジェ」として活躍中の中西和也氏の活動報告の前後に実施した。



図1 家島諸島（写真手前が家島本島）の全景
（出所）姫路市フォトバンク

2. 仮説の設定

アンケート調査を行うに際して、以下の4つの仮説を設定した。

I. 家島諸島の認知度は姫路市出身の周辺地域に限られているのではないかと

仮に関係がある場合、もっと広く認知させるべきであり、特に学生をターゲットとしているためSNSの活用が必要である。

II. 自分たちが作成した家島PJ新聞を閲覧した者の方はツアーへの出資額が大きいのではないかと

確認されると、新聞の内容面のブラッシュアップや、より多くの人にもっと見てもらえるような場所に掲示することが必要である。

III. 回答者の出身地の地域により自然豊かな地域への関心が異なるのではないかと

関係があり、さらに都市的な地域に住む人の方が自然豊かな地域への関心が薄いという結果になれば、関係人口論では都市的な地域に住む人に焦点を当てた解決策を考えることが必要である。

IV. 回答者の性別、学年でツアーの指向が異なるのではないかと

異なるのであれば、ツアー参加者の属性に合わせたきめ細かいツアーの内容づくりが必要である。

3. アンケート調査の結果

①家島諸島の認知度・訪問歴・イメージについて

「まちづくり論」の授業を習うまでに兵庫県姫路市にある家島諸島をご存知でしたか。」という質問には、54%の学生が「知っていた」と回答している。（図2）これは、学生の半数以上が兵庫県出身であることに起因していることが予測できる。

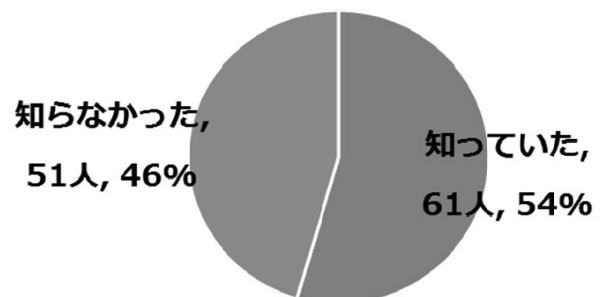


図2 家島諸島の認知度（n=112）
（出所）学内アンケート調査
その中で、13%の学生が「訪れたことがある」と回答している。（図3）

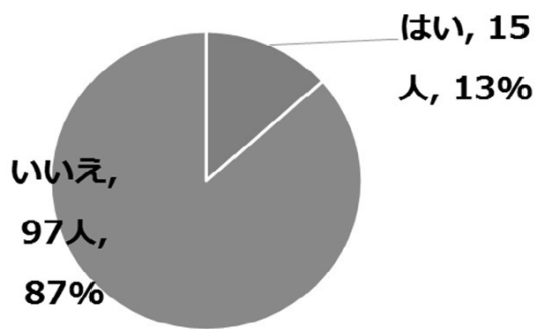


図3 家島諸島への訪問歴 (n=112)
(出所) 学内アンケート調査

さらに、「家島諸島に訪れた目的は何でしたか。」という質問には、観光が27%、学校行事が40%となっている。その他の意見としては、部活動や親戚の家に行くなどが挙げられた。(図4)

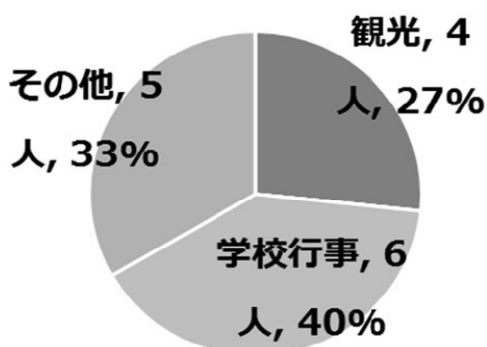


図4 家島諸島への訪問目的 (n=15)
(出所) 学内アンケート調査

家島諸島に対するイメージに関する自由記述形式での回答では、「観光的な島」「自然」「新鮮な海産物が食べられる」などが主な回答であった。
②関係人口になる可能性について

本調査では、島という特異な地域を研究対象地としているため自然豊かな地域への関心や関与についての質問から関係人口になりうる可能性があるのではないかと考えた。

まず、出身地の特性について尋ねたところ、自然豊かな地域と都市的な地域共に50%であった。(図5) 後の設問にある自然豊かな地域への関心・関与に影響していると考えている。しかし、個人の主観であるため断定することはできない。

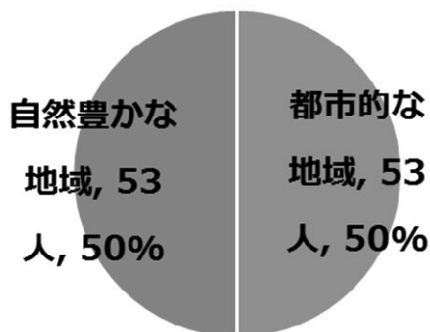


図5 出身地の特性 (n=106)
(出所) 学内アンケート調査

次に、「自然豊かな地域にどのようにかかわることに興味をお持ちですか。」質問には、「地域の特産品購入」が39%、「ボランティア活動」が37%、「頻繁な訪問」が19%となった(図6)。しかし、「最近一年間で自然豊かな地域を訪れた目的」について問うと、「旅行・レジャー」が55%、「授業」が34%、「帰省」が24%を占め、「農業体験や交流活動、地域貢献活動」は14%であった。ここから、地域と関わることに興味はあるが、行動に移している人は少数派であることが理解できた。

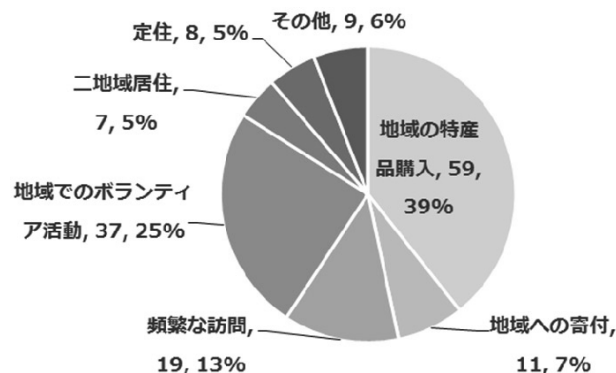


図6 自然豊かな地域への関与 (n=112)
(出所) 学内アンケート調査

また、「過疎化・高齢化により活力が低下した自然豊かな地域に対して、あなたはどのように関わりたいですか」という質問には、「積極的に参加したい」が14%、「機会があれば協力したい」が74%という結果であった(図7)。以上より、自然豊かな地域に向けて何らかの活動をするというニーズは調査対象の学生にあるのではないかと考えられる。

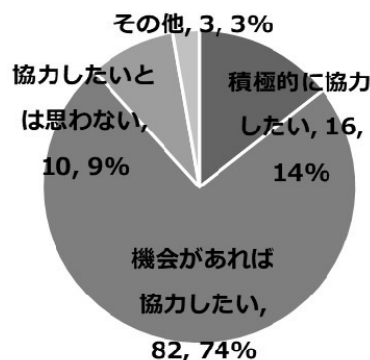


図7 自然豊かな地域の活動への参加意欲 (n=111)
(出所) 学内アンケート調査

③関係人口の理解度

学生は関係人口という新しい言葉やこの言葉が示唆する地域への多様な関わり方を知らないのではないかと考え、「交流人口、定住人口、関係人口という言葉をご存知ですか」という質問をした。その結果、「全く知らない」と回答したのは「交流人口」が72%、「関係人口」が85%、「定住人口」が24%であった。

④プロジェクトについて

まず、プロジェクトを周知するために発行している家島PJ新聞の閲覧を尋ねたところ、見たことがある人が12%という結果であった。(図8)

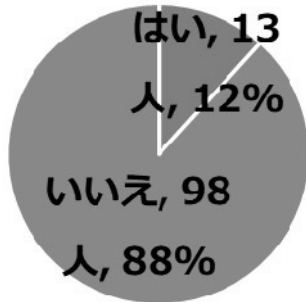


図8 家島PJ新聞の認知 (n=111)

(出所) 学内アンケート調査

続いて、ツアーの指向やツアーに参加する際の希望予算を聞いた。ツアーの指向は「体験できるツアー」が32%、「島のグルメ巡りツアー」が30%、「きれいな景色がみられるツアー」が28%であった。(図9) ここから、ツアーの企画案であった写真を使うツアーに決定することができた。

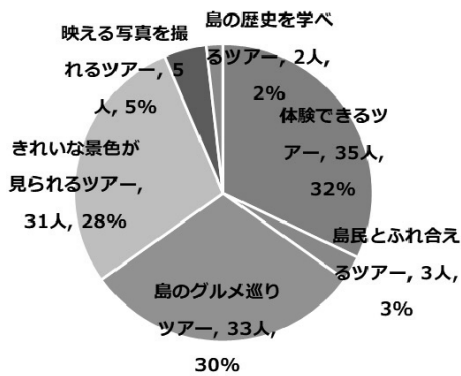


図9 ツアーの指向 (n=109)

(出所) 学内アンケート調査

ツアーの希望予算については1000円～3000円が55%である一方で、5000円以上出すことができると答えた人が6%であった。(図10)

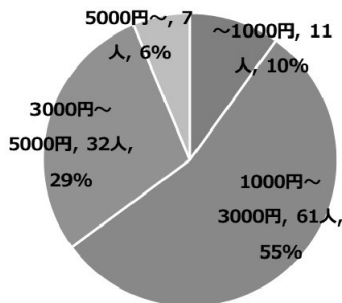


図10 ツアーの希望予算 (n=111)

(出所) 学内アンケート調査

最後に、中西氏の講演を受けた感想を自由記述で回答を得た。すると、「時間がゆっくりと流れていそうで、行ってみたいと思いました。」といった家島諸島に興味を持った、訪れたいという肯定的

意見が多数あった。その他、「(中西氏の活動は)関わっている人も活動を楽しみながらも課題を解決していて、魅力的な活動だなと思いました。」などの中西氏の活動自体に魅力を感じた、面白いと思ったという意見が多数あった。以上より、実践家の活動報告が回答者側の家島諸島に対する興味関心を高めたと思われる。

⑤仮説の検証

I. 家島諸島の認知は姫路市出身の周辺地域に限られているのではないか

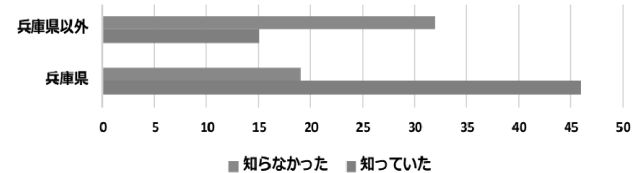


図11 家島の認知度と出身地

($\chi^2=16.6, df=1, P=0.000046$)

(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいと思われる統計的な証拠が得られた。よって今後は、兵庫県以外への人が重要であり、例えばSNSの活用によるより積極的な周知活動が考えられる。

II. 自分たちが作成した家島PJ新聞を閲覧した者の方はツアーへの出資額が大きいのではないか。

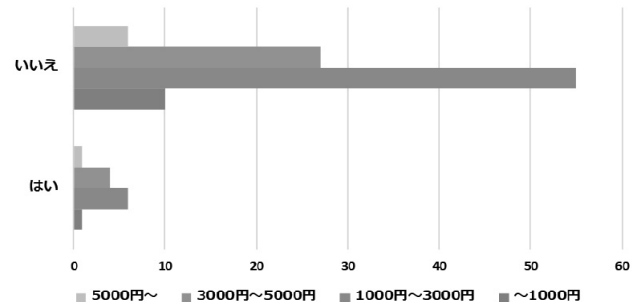


図12 家島PJ新聞の認知とツアーへの意欲

(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかった。まずは新聞を見てもらうことが重要である。例えば、食堂付近への掲示などは有効であると考えられる。

III. 回答者の出身地の地域により自然豊かな地域への関心が異なるのではないか

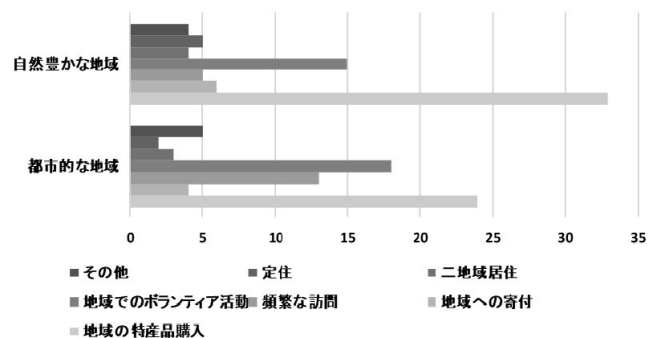


図13 出身地の属性と自然豊かな地域への関与

(出所) 学内アンケート調査

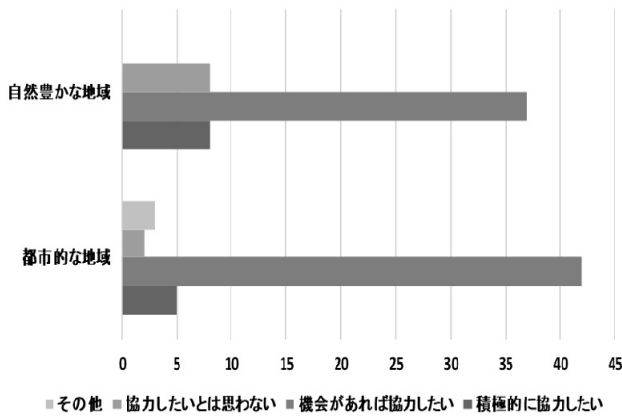


図 14 出身地の属性と自然豊かな地域への関心
(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかった。関心について「機会があれば協力したい」が多く、関与については「地域でのボランティア活動」が多かったので家島側から学生に対してボランティア活動やイベントの参加を募れば興味を持つ学生は多いのではないかと推察される。

IV. 回答者の性別、学年でツアーの指向が異なるのではないかと推察される

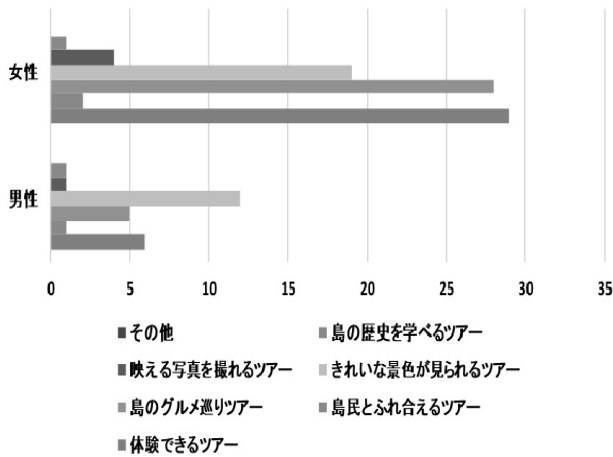


図 15 性別によるツアーの指向
(出所) 学内アンケート調査

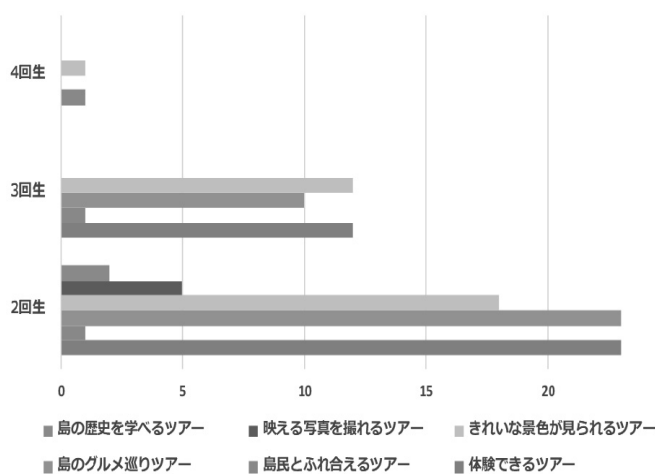


図 16 学年によるツアーの指向
($\chi^2=22.75, df=12, P=0.011$)
(出所) 学内アンケート調査

性別では仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかったが、学年では仮説が正しいという統計的な証拠が得られた。しかし、標本数が少ないので信頼度は低い。やはり、体験、グルメ、景色が上位にあり、ツアーの内容は上記 3 点を含めたものが望ましい。

4. 考察・提案

回答をした兵庫県立大学環境人間学部の学生は自然豊かな地域への関心やそこでの活動参加意欲が高く、家島諸島で考えられる関係人口図(図 17)に当てはめると、彼らは「無関心・無関与」「交流人口」といえる。一方で、潜在的には自然豊かな地域への地域貢献活動意欲が高いため地域の担い手として重要な役割を果たしていることが分かった。現状では、彼らの役割をうまく機能させることができない状況である。図 7 で示すように機会さえあれば地域との関わりに参加したという学生が多いため、家島側からアプローチが必要である。具体的な内容としては家島秋祭りの参加を求めることや、家島の学校で研究や学生の成果を発表する場を提供することで少なからず家島の発展に寄与するものと考えられる。

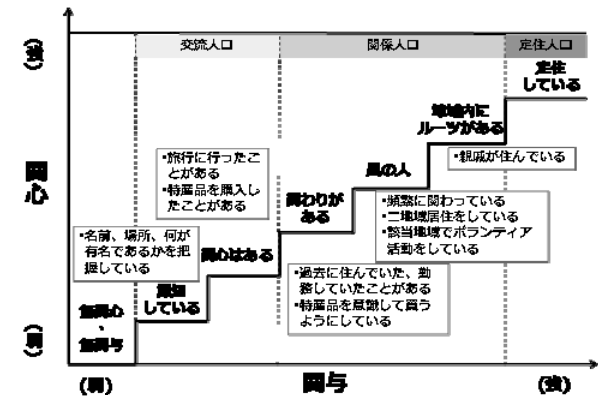


図 17 関係人口図

(出所) 小田切 (2018), pp. 15 を参考に作成

参考文献

小田切徳美 (2018) : 関係人口という未来—背景・意義・政策, ガバナンス/ぎょうせい (202), pp. 14-17
姫路フォトバンク :
www.city.himeji.lg.jp/topic/photobank.html

謝辞

25 私たちのアンケート調査に参加していただいた学生の皆さんに対して記して感謝申し上げます。

(文責: 濱田悠輔)